戸を叩く女

真昼の乱暴な、強引な嵐の中を私は戸を叩き
新しい苦痛により、微生える苦渋を塗り潰そうと
激しい大粒の雨に鞭打たれて戸を叩き
嘲笑の部屋を、欲望の白い歯の間に投げ込もうと
背にしがみつく魔物の肌触りにおぞけりて戸を叩き

‘これこそは人間の永劫の軌跡か
　荘厳な、逃亡に次ぐ逃亡の廊下か

　生命(いのち)あることの身の毛もよだつ確かな証しか‘

生命から逃るべく生命にしがみつき
黒い異臭放つ汗の沁み込む閨房の扉を激しく叩き、叩き・・・

(1982.4.5)